

幼稚園・保育所で取り組む『身振り表現』の考察

— 幼児の豊かな表現を求めて —

A study of “Expression of Gestures” in Kindergartens and Nursery schools — An Approach based on Children’s Expressiveness —

前田 美智代* 黒崎 令子**
(平成29年1月18日受理)

要約

幼稚園や保育所等の教育・保育内容は、近年多岐にわたっている。教えること、覚えて繰り返し練習することが教育と捉えられていることも少なくない。幼稚園・保育所は次代を担う子どもたちが喜びや楽しみを味わい、さらにその意欲を養うところである。教えること、覚えて繰り返し練習させることが中心の保育内容では、子どもの成長・発達に偏りが生じるのではないかと危惧する。本稿では、子どもたちが喜びや楽しさを豊かに表現する力をつけていくために『身振り表現』が効果的であることに焦点を当て、実践例を基に保育内容『身振り表現』について考察を試みる。

キーワード：表現活動、身振り表現、自然

keywords：expression activity, expression of gesture, nature

1. はじめに

幼稚園や保育所等では表現活動として、音楽表現・言語表現・身体表現・造形表現等々の活動がなされている。ここでは、主に「身体表現」の中の『身振り表現』について考察したい。身振り表現とは、「身体の動きによって自己を語ることである」¹⁾との広岡の考えに基づき、子どもたちの興味や関心事にかかわる題材を手掛かりに、見たこと・聞いたこと・触れたことを通して自分なりに身体を用いて表現することと捉えている。そこにはイメージする力、理解する力も備わってくることから、身振り表現は子どもの感性を培ううえで重要な表現活動であると理解できる。また、保育内容については、今日までにいろいろと歴史の変遷をたどり現在に至っていることも承知している。保育内容の変遷に触れながら子ども観や保育観・教育観が時代と共に変遷していることも理解したいと考える。そこで今回は、◇身振り表現とは、◇保育内容の変遷、◇身振り表現の実際、◇お話し遊び（劇遊びを含む）における身振り表現◇

身振り表現の題材、◇身振り表現の教育的意義等々の内容でテーマに迫ってみたい。

2. 身振り表現とは

(広岡キミエの身振り表現探究過程より)

身振り表現は、保育内容の領域「表現」に属すると認識したうえで、もう少し詳しく身振り表現についての解釈を示したい。身振りとは、振りをするという意味で、子どもが何かのまねをするというところから端を発していると考えられる。例えば蜂になって遊ぶ、 TENTウムシになって飛ぶと言うことであり、形体的なまねからの出発である。「物まねは、子どもにとっては自然なもの、楽しいことであり、決して特異なものではない。」²⁾と前述の広岡は記している。しかし、単なる物まねではなく、元気な○○、悲しい○○というように情動・情緒を共に表すものとする。身体を用いて何かを思いながら（イメージしながら）表現することが身振り表現であると解釈できる。よって子ども一人一人が感じたり思ったりしたことを自

(*まえだみちよ 保育科准教授 幼児教育・保育)
(**くろさきれいこ 保育科講師 幼児教育)

分なりに表現することであり、かつての遊戯のように音楽に合わせて皆で同じふりをするというのではない。岩崎洋子は、「子どもの身体活動の動機は遊びに対する好奇心や意欲であることを理解しなければならない」³⁾と記しているし、高野牧子は「うきうきわくわく身体表現遊び」⁴⁾で「自分なりの表現を通して、豊かな感性や表現力、創造性を育てる」と記している。このように、身振り表現や身体表現は自由であり、創造性豊かであるものとして捉えられる。また、DVD「子どもの社会性を育てる」⁵⁾では、図鑑を見ている父子がテントウムシや蜂が出てきたページで子どもが

大変喜んだ。それを見た父親が子どもに「テントウムシってどうやって飛ぶの?」という子どもは手を羽にして部屋を大きく回って飛んだ。子どもの表情は楽しそうで晴れやかであり、子どもが喜んでいる姿が映し出されている。この場面でも何も道具は用いず、すぐにその気になって楽しめている。これが身振り表現の良さである。しかし、身振り表現や身体表現が今日のように確立するまでには色々な変遷をたどっている。次項では、その変遷の一部に触れ時代によって子ども観や保育観・教育観がどのように変わってきたのか理解を深めたい。

3. 幼稚園教育内容（保育内容）の変遷の概略⁶⁾

図1)

年代	法令等の名称	内容・項目
明治32年	幼稚園保育及設備規程制定	遊嬉・唱歌・談話・手技
大正15年	幼稚園令	遊戯・唱歌・観察・談話・手技
昭和23年	保育要領—幼児保育の手びき— 幼稚園・保育所・家庭における幼児の楽しい経験	1見学 2リズム 3休息 4自由遊び 5音楽 6お話 7絵画 8製作 9自然観察 10ごっこ遊び 11健康保育 12年中行事

上の図1)で、広岡は身振り表現に近い2.リズムに着目し、「保育要領の中にリズムという項目があり、創作表現、自由表現という言葉が旋風のごとく吹きまわって現場を驚かした。既成のお遊戯、童謡踊りなるものは、子どもの自然な生活にはそわぬものとして拒否し、全部を子どもの創造にまかせ、いっさい型にはめてはならない。自由にのびのびと個々の個性を発揚させるようにしたのであった。」⁷⁾と記述し現場の混乱ぶりを語っている。昭和23年といえば太平洋戦争終戦から3年目であり、その前年に新憲法が制定され表現の自由等が謳われたものの、それまでの統制された美を良しとした時代とのギャップの大きさに「自由」についての考え方や「自由」を教育に取り入れるための方策等は模索中であつたと推察できる。もう1点、広岡が自由にこだわるのは、あくまでも子どもの発想を大事にしたいとの願いからであり、幼児期の子どもが、子どもだけでどこまで自由に表現できるかということへのこだわりで

もあると感じる。そのことは「子どもにとって無拘束、自由な状態は、それほど楽しいものではないらしい。子どもは確かに窮屈に縛られると解放されたがる。しかしまったく自由にされると持ちこたえることができない。彼らはまだ依存的なのである」⁸⁾と記載している。この記述から子どもが自由に表現できるのは、保育者の支えがあつてのことだと理解できる。そこで下記の実践例から、子どもの表現や自由性について考えを深める。その後昭和31年に幼稚園教育要領が刊行されている。そこには、「教育課程の基準としてより大綱化を図る観点から「望ましい経験」を①健康②社会③自然④言語⑤音楽・リズム⑥絵画・製作の6領域に分類整理し、指導計画の作成を容易にするとともに各領域に示す内容を総合的に経験させることとして小学校以上における教科書との違いを明示」している⁹⁾。現在の幼稚園教育要領の保育内容の源流である。

4. 身振り表現の実際

《秋の保育》

表1) 実践例① 平成28年9月9日(金)(加古川市B幼稚園4歳児)

保育者の言葉	子どもの言葉・身振り表現・表情
<ul style="list-style-type: none"> ・昨日は、警報が出て幼稚園お休みだったね。 ・昨日みたいな雨の時は、外に出たら危ないね。川や溝がどこにあるか分からなくなるし雨の力も強いものね。みんなみたいな小さい子どもだったら流されてしまうかもしれないね ・でも今日のお天気はどう？ ・そうやね。よかった！よかった！ ・今日は雨も止んだからお庭に行った人もいたね。 ・雨粒どこから来たの？ ・いっばいって言っているけど、どこに？ ・面白いね。 ・みんな雨粒よ。(雨になることを促す) ・子どもたちの表現に合わせてピアノを弾く。 ・雨粒さんたくさん振っている。 一休みしよう。 (一人一人の子どもにどこにたまっているか聞いてみる) ・優しい風が吹いてきたよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ザーザー雨やった。 ・危ないから。 子ども達の表情は、皆真剣 ・いい天気。 ・オーケー。 ・雨降っていない。 ・雨粒いっばい。 ・雨粒ジャンプした。 ・お空から。 ・雲から。 ・細かい葉っぱの上。 ・まるい葉っぱの上。 ・ケンケンをしながら雨粒になる。 ・後ろけりをしながら雨粒になる。 (リズムに乗って軽やかに雨粒になる) ・床に伏せる。(土の上に降りた) ・体を丸めて、すわる。(丸い葉っぱの上) ・長く寝そべる。(長い葉っぱの上) 他にも友達とくっついて座る子どもも数人いる。 ・ころころ転がる。 ・ゆらゆら揺れる。 ・ポトンと落ちる表現の子どももいる。

わずか15分程度の保育であるが、子どもそれぞれ自分の思ったことを話し、体で表現している。この表現の根幹は、園庭で経験した雨粒とのやり取りにある。この園では、毎日のように園庭で何かを見つける遊びが年間を通してなされている。特に自由遊びでは、子どもの種々様々な発見がある。子どもたちの経験したことは保育者も共にしているの、子どもの気持ちが保育者にも通じている。保育者が投げかける言葉は具体的で、子どもの気持ちに近いことがわかる。保育者は子どもたちに、決してこうでなければならぬということは一切言わない。むしろ一人一人の表現を見極めることに重点を置きその気持ちに寄り添う。子どもたちの表現が様々で自由なのは、保育者との相互関係が良好だからであり、子どもたちの興味

や関心を高める支援を保育者がしているからだと言確信できる。

表2) 実践例② 10月11日(金)(加古川市B幼稚園5歳児)・・・絵本「どんぐり家族」

保育者の言葉	子どもの言葉・身振り表現・表情
<p>・どんぐり広場ってどんどころ。</p> <p>・葉っぱやきのこもあって面白そうね。</p> <p>・どんぐりさんたちが、なっている木のところとは違うところにあるの？</p> <p>・どんぐりさんたちいっぱい遊べるのやね</p> <p>・どんなことして遊ぶのかな？</p> <p>・まわりっこって目が回るのと違う？</p> <p>・そうか、ここに葉っぱで土俵つくっているけど、ここで何するのかな？</p> <p>・へーどうやってするの？</p> <p>・その人のことなんて言ったかな？</p> <p>・お相撲はどうやってするの？</p> <p>(行司と二人のどんぐりを指名する)</p>	<p>・どんぐりが集まって遊ぶ。</p> <p>・葉っぱもいっぱいある。</p> <p>・お手々みたいなみじの葉っぱもある。</p> <p>・どんぐりの葉っぱは、細い。</p> <p>・きのこもある。</p> <p>・違うとこ。</p> <p>・うなづく。</p> <p>・かくれんぼ</p> <p>・どんぐり相撲</p> <p>・まわりっこ</p> <p>・バレリーナーみたいに回るのが楽しい。</p> <p>・どんぐり相撲。</p> <p>・〇〇やまーって呼ぶ人がいる。</p> <p>・行司さん。</p> <p>・どんぐりやから手は使わないです。</p> <p>(子ども同士は皆了解)</p> <p>(行司役の子どもが二人の名前を呼び込み相撲が始まる)</p> <p>行司役：はっけよーいのこった。</p> <p>二人のどんぐりの子どもが相撲を取る。</p> <p>力相撲のような押し相撲をする。</p> <p>見ている子どもたちが、やんやと応援する。</p>

この遊びは、絵本「どんぐり家族」・・・小野美樹(作)・鈴木悦郎(絵)を保育者に読んでもらった後、子どもたちの間で、ごっこ遊びが盛んになる。中でもどんぐり相撲が大盛況になったので、皆で楽しめるように保育者が場を設定した。

絵本(どんぐり家族)のあらすじは、以下の通り。

山の上のどんぐりの子どもたちが、お日様や小鳥たちが色々なお話をしてくれるのを楽しみにしている。そのうち自分たちも下に降りてみたくなる。お母さんがとめるのも聞かずに飛び降りたくさんの仲間と出会い、ダンスをしたり、歌を歌ったりする。

その歌の歌詞の中には♪どんぐり子どもは相撲取る♪とある。

そのシーンのどんぐり相撲の遊びがこの日のメイン。この実践例では、子どもと保育者が真正面

から向き合って遊びを進めていることが窺える。

写真1) 写真2) は、絵本「どんぐり家族」に出てくるどんぐりの相撲大会の1シーン。どの子どもやってみたく遊びである。また、写真3) もお話に因んだ制作。皆で協力して一つの情景を作っていた。写真4) は3歳児が体いっぱい使って製作したどんぐり。



写真1) はっけよーいのこった！



写真2) どんぐりの相撲大会。



写真3) どんぐり広場ができました。



写真4) 太っちょどんぐりがいっぱい！

《春の保育》

実践例③ 昭和50年4月23日(水) A市N幼稚園
(40年前の記録から 保育者は筆者)

この日、保育室に職員が小さなオタマジャクシを持ってきてくれた。とっさのことで予備の入れ物がなく少しの間、金魚の入った水槽にオタマジャクシを入れたという経緯がある。保育者(筆者)は、金魚が小さく、2、3匹であったのでわずかな間だけ一緒に入れても大丈夫だと思っていた。が子どもたちはそうは思っていなかった。そして、下記の表3)の子どもたちの言葉や動きがあった。特にN児の勢いに押されて子どもたちは活発であった。オタマジャクシ(100匹以上はいた)を全部池に入れるまでに要した時間は、1時間程度だったと思う。どの子も喜々としていたので、止めることはできなかった。終わった後は、少々疲れ気味ではあったが、充実感、満足感が漂っていた。暫く休憩してからオタマジャクシごっこが始まった。金魚になる子とオタマジャクシになる子がいる。金魚に食べられるからといって逃げたり、金魚に捕まりそうになったオタマジャクシの子を助けたりする。他愛のない遊びであり、追いかける・逃げることに終始していたが、楽しそうであった。

この遊びは、子どもたちがオタマジャクシを助けたい一心で生まれた遊びになった。淡いながら命を救うことを感じてのことだと思った。

表3)

保育者の言葉	子どもの言葉
<ul style="list-style-type: none"> ・少しの間だけだから大丈夫よ。 ・すぐ後で入れ替えるから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・N児……オタマジャクシと金魚と一緒に入れるとオタマジャクシが金魚に食べられるよ。 ・他児が大勢集まってきてそうさそうさ！！ ・N児……でもさっき、このオタマジャクシのしっぽ食べられそうだったよ。 ・N児……だめだよ。全部食べられるよと言ったかと思うと手でオタマジャクシを掴って、2階の保育室から1階の池に入れに行く。 ・次々と他児も続く。 ・喜々として、クラスのほとんどの子どもが参加する。 ・1匹も残らずオタマジャクシは、池に引越した。

このN児(卒業者)とは今年40年ぶりに再会し、上記の遊びの話をすると思えていた。彼は長じて都会の喧騒を離れ現在は、長野県の木工工房でいろいろな作品を制作している。自然を愛で、その厳しさを知り、その地で根を下している。そしてお百姓さんを尊敬し、感謝する生活らしい。幼児時代の生活と今の生活の因果関係はおそらくないと思うが、今も自然を大切にしたい気持ちが大きいことを知ることができた。

3学期になると、一年の締めくくりとして、子どもたちの成長の姿を劇遊びとして発表する。ここで、お話遊びから劇遊びへと発展した実践例を表したい。

5. お話遊び(劇遊びを含む)における身振り表現

加古川市内の幼稚園から園の自主研究会、数園が集まる市立幼稚園教育研究会グループ研究会等、指導助言の依頼を何件か頂いた。現場の先生たちの保育を目の当たりにし、先生たちの歩みと悩みに付き合っ、課題解決の手助けになればと願い、共に学んできた。

助言をしてきた内容を記し、今後の保育力向上に役立てられればと願う。また学生たちに伝えていくことで、現場の息吹を直に感じとり、自身の向上に繋がればと願う。

特に一番依頼の多かった3学期のお話の保育にスポットを当て、述べていきたい。

幼稚園の3学期ともなれば、年齢により僅か差はあるものの、友だち同士の繋がりはかなり強く

なる。一人一人に自信が出来、大きく成長したと実感させられる。その心身ともに大きくなった子どもたちの意欲を満足させ、充実感を味わうことのできる“遊び”はそれほど多く見つからないのではないだろうか。私たちはかねてからお話(短い絵本から長編の童話まで)を読み、そのお話で遊んだ経緯を、劇にまとめ、保護者の前で発表するという遊びを3学期の主たる保育としてきた。

3学期だけでなく、1年ないし2、3年間の保育の成果を保護者の前に示す、言わば卒業論文のようなものと考えてきた。一人の子どもが、心身ともに丸ごと成長してきた証を示すことのできる手立てでもある。

(1) 「劇遊び」をテーマに取り上げる理由はいろいろあるが、

- ①物語を理解するという大きな作業である。(お話の筋が分かる事と物語の全容が理解できる事とは違う)
- ②心に留まった場面や、登場人物になって遊ぶことで、お話の理解を深める。
- ③話の理解の仕方が、大人と子どもは違う。大人は筋を追って理解するが、子どもは登場人物(主人公)に自分を重ねて、物語の中で遊ぶことで物語を理解していく。
- ④子ども独特のアニミズム的思考が遊びを本物にし、理解を深める手助けとなる。
- ⑤何日もかけて友だちと力を合わせての小道具づくり、劇の流れに沿って小道具を動かす作業、

遊びながらお話を理解していく時間等、劇遊びは文字通り全身全霊をかけての作業となってくる。この時期にこそできる保育である。

- ⑥クラス総動員で全員が力を合わせて完成させる体験は、心身ともに大きく育ててくれる。
- ⑦何物にも代えがたい充実感を味わうことが出来る。
- ⑧子どもは人に見てもらうことが好きである。
- ⑨拍手をもらうことでさらに自信が出来る。

以上9つの観点から3学期にお話遊びから劇につながる事が最善のテーマと考える。

単に登場人物のセリフを言うだけではなく、身振り手振りでその登場人物になりきる楽しさを味わうのである。

以上のことを踏まえ保育現場の葛藤を述べてみたい。

実践例4「みにくいあひるの子」

担任の記したねらい

お話の読み取りとして、「偏見を持たず、相手をおもいやる優しい心、信じる心を大切にする。つらい経験を重ねた後は、必ず報われることがあるので、希望を失わず歩むようにとの教えが込められている。」ことが分かる、とある。

◎上記のねらいについてコメントしたこと

物語を聞いて教訓的な解釈をするのは大人独特の理解の方法で、子どもは違う。

子どもは面白い場面に、まず心が動く。

このねらいからも物語に対する担任の捉え違いが明確である。

この物語で一番大切にしたいこと、それは、

数々の苦難を乗り越える力となったのは、初めて見た、息をのむほどに美しいハクチョウに対する感動、再び会いたいとの熱い憧れ、未知の事実だが、憧れの存在に対する同族の不思議な感覚

以上の観点を大切に遊んでいきたいものである。

この日の保育のねらいは

「数々の困難を乗り越え、ハクチョウになった喜びを味わわせる。」

このテーマで行った 平成28年2月5日の保育
2年保育5歳児 男児15名 女児16名 計31名
(指導案)

本時のねらいと内容

- 今までの苦労や困難を乗り越え、ハクチョウになった驚きや喜びや仲間に受け入れられ、認めてもらう嬉しさを感じる。
- 友だちと思いや考えを言葉や身体を使って伝えあう楽しさを味わう。
- ・みにくいあひるの子が最後にハクチョウになり、他のハクチョウたちに受け入れられ、認めてもらう嬉しさを感じる。

展開

時 間	予想される幼児の活動	☆環境構成 ◎教師の援助
11:00	<p>○話し合いと身振り表現をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春になり、池で憧れの白鳥を見つけるみにくいあひるの子 ・勇気を出してハクチョウに近づくみにくいあひるの子 ・水に映った自分の姿を見て、驚き喜ぶ、みにくいあひるの子 ・仲間と共に飛んでいくみにくいあひるの子 <p>○歌を歌う 「ハクチョウ」</p>	<p>☆落ち着いた話し合いができる場を作る。</p> <p>◎初めに幼児の言葉を繋ぎながら、みにくいあひるの子のこれまでの生活を振り返る。</p> <p>☆今までの辛い情景ではなく、春の暖かい素晴らしい情景を伝え、子どもたちにイメージさせる。</p> <p>◎それぞれの幼児の思いを受け止め、感じたこと思ったことを伸び伸びと表現させる。</p> <p>◎ハクチョウに再び出会った、みにくいあひるの子の心の変化を感じられるよう教師が言葉で補う。</p> <p>◎憧れていたハクチョウになった驚きや喜びを表情や身体、言葉を使って表現する姿を認め、全体に知らせていく。</p> <p>☆美しいハクチョウたちの姿やハクチョウになったみにくいあひるの子の喜ぶ姿を思い描きながら歌えるよう丁寧にピアノを弾く。</p>

保育の内容

<p>T 「アヒルの子どもがいる世界は春に変わって来ました。」</p> <p>T 「みにくいあひるの子は、あのお池に、やってきました。それでどうしたの？」</p>	<p>C 「お池を覗いてハクチョウだったことに気付いた」</p>
---	----------------------------------

と筋を追うだけで進めてしまった。

◎コメントしたこと

これでは子どもたちは表面的な、話の筋を追うのみで理解が深まらない。この話し合いの後ハクチョウになって飛んだが、ただ飛ぶだけ。一人を

ピックアップ、また、グループ別にと、表現する子どもを変えていっても、全く深まっていけない。同じことを次々と人が変わって表現しているだけである。

子どもが理解できていない様子を見た先生は

<p>T 「もっときれいなハクチョウよ」</p> <p>T 「真っ白よ」 「夕日を浴びて輝いている白鳥よ」</p> <p>T 「もっと羽を大きく」 「もっと羽を柔らかく」</p>	<p>C (ハクチョウになって飛ぶ) ただ飛んでいるというだけ。だんだん疲れてどたばたと飛び続ける。</p>
---	--

最後には先生が指示する通りに動くこどもたちの姿に、さすがの先生もお手上げで、保育を終えてしまった。

◎コメントしたこと

この日の保育での問題点

春になり池で憧れの白鳥を見つけるみにくいあ

ひるの子がこの日の中心の活動である。

表現の保育で一番大切なことは、今自分がいるのはどのような場所で、自分は何になっているかということが、明確に子どもに理解されているということである。例えば、この日を例にとって述べると、冬から季節が変わりようやく春が巡って

きたことを、子どもの理解の程度に付き合いながら丁寧に伝えていく必要がある。

ところが担任は昨日も似たような場面で遊んでいるため子どもたちは分かっていると勘違いし、場面の設定を簡単に過ごしてしまった。

どんなつらいこともあの白鳥の事を思うことで耐えられるほど、憧がれていた存在だったが、実は自分がそのハクチョウだったという驚きと感動を理解するには至らない。

ようやくたどり着いたところが、あの白鳥の群れに出会った池である。

それと、ここにも一点表現の保育の難しいところがある。

人間である子どもたちがそのものになって表現するのだから、たとえばハクチョウそのものになれるわけではない。もっときれいに、もっと輝くようにと要求すればするほど子どもたちは形にこだ

わってハクチョウへの思いが消えてしまう。

見た目は例え不器用でも、子どもの心が「私はあのハクチョウ」と思ってその子なりの表現をしていたら、その気持ちを認めていかないと、子どもの心はどんどん離れてしまう。上手下手ではなく、この子の表現には思いが籠っているか否かが判断できるのは日頃その子たちと関わり、すべてを知っている担任に他ならない。この日、子どもたちはハクチョウのまねの比べあいという悲惨な保育に終わってしまった。

ただ、一人の男児が指先までこだわって、柔らかな羽を作り、うんと伸びをして、静かにそっとそっと音を立てずに飛んでいた、これこそあの憧れの白鳥！と私は思ったが、この男児は少しわがりの遅い子だそうで、先生の眼中になく、ただの一度もピックアップされることはなかった。

再度、試みた保育

T 「この池はどんな池？」	C 「なんてきれい！と、胸がドキドキしたあのハクチョウに初めて出会った池」
T 「そう、この池にたどりついて、みにくいあひるの子はどんなことを思った？」	C 1 「あのととてもきれいな真っ白なハクチョウの事を思い出した。」
T 「このお池の周りの景色はどんなの？」	C 2 「もう一度会いたいなあとお池に着いた。」
	C 3 「あのきれいな鳥はいないかなあと思って周りを見た。」
	C 1 「リンゴの木には真っ白なお花がいっぱい咲いている」
	C 2 「リンゴのお花はとってもいい匂い」
	C 3 「春になった。お花がいっぱい咲いている」
	C 4 「もう北風は止んで春の暖かい風になって気持ちいいの。」
	(丁寧に聞いてやると子どもたちは知っていることをそれぞれ話す。子どもの心にある情景がそこで理解できる。)

このように子どもにわかる情景描写が表現遊びには必須である。ところが大人は自分自身に知識があるため、少しの説明で子どもたちにその様子が描けていると、勘違いしてしまう。

今、自分はどんなところにいて、何になっているのかが明確にならないと遊べない。

表現は、というより保育は遊びである。遊びから学ぶのが保育の真髄である。

実践例5 「森のコッコさん」

2年保育 4歳児 男児16名 女児19名 計35名
(指導案)

本時のねらいと内容

- コッコさんを捕まえるキツネとキツネから逃れてネズミの家に向かうこっこさんになって楽しむ
- ・おなかをすかせ、コッコさんを狙うきつねや、勇気をもってネズミの家に卵を届けるコッコ

さんになる。

展開

時 間	予想される幼児の活動	☆環境構成 ◎教師の援助
	<p>○話し合いと身振り表現をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お腹をすかせ、森の中を歩き回るきつね ・卵を届けに行くコッコさん ・コッコさんを狙うきつね ・用心しながら歩くコッコさん 	<p>◎何を食べていないのでお腹が空いていることや、今日こそコッコさんを捕まえるというキツネの思いを伝えて表現させる。</p> <p>◎怖くてもネズミの為に大切な卵を届ける勇気あるコッコさんの気持ちをみんなで共有しながら表現していく。</p> <p>◎コッコさんの後をつけていくキツネの行動を表現しながら分かり合っていく。</p> <p>◎前ばかり見て歩くのではなくキツネはどこから来るかわからないことを伝え、表現に結び付けていく。</p>

保育の内容

<p>T 「コッコさんが森中に響き渡る声で卵が産まれたことをお知らせしています。 C 1 ちゃんのコッコさんよ」</p> <p>T 「いい声やね。でも森の奥の方にいる動物にはちょっと聞こえないかもしれない。C 2 ちゃん」</p> <p>T 「なんて大きな声でしょう。この声を森中動物たちが待ってるのね。さあ、卵をもらいに行きましょうと駆けつけてくるよ。」</p> <p>T 「でも今日は違ったね？」</p> <p>T 「森の奥に隠れてコッコさんが出てくるのを今か今かと待っていたキツネが喜んだね。」</p> <p>T 「キツネはどこで待っていたの？」</p> <p>T 「うーん、さすがね。うまいことすっかり隠れることのできる木を見つけたね。じゃあみんなのキツネ、木に隠れて！」</p> <p>T (ただじっとしているだけの子どもに) 「C 8 ちゃんしっぽが見えている。コッコさんすぐにキツネがいるとわかって家に帰ってしまうよ」</p> <p>T 「C 8 ちゃんさっきまでしっぽが出ていたから、いることが簡単にわかってしまったけど、今はもうどこにもいなくなった。うまいこと隠れたね。」</p> <p>T 「コッコさん、森は静かよ。大丈夫かな。ネズミさんが待ってるから出かけないとね。でもよく気をつけてね。」</p> <p>「C 9 ちゃんのコッコさんよ。」</p> <p>T 「C 9 ちゃん、用心しているコッコさんね。これではキツネは、コッコさんを襲えないね。」</p> <p>T 「C 8 ちゃんのコッコさん、今日はチャンスよ。コッコさんを捕まえるチャンスがあったらすぐ捕まえるのよ。よく見てね。」</p>	<p>C 1 「コケッココー」</p> <p>C 2 「(声を張り上げて) コケッココー！」</p> <p>(その場所で子どもたち一斉にコケッココーと声を張り上げる。) ここでもう全員がコッコさんになっている。</p> <p>C 3 「ネズミさんが病気なので卵を届けないといけない」</p> <p>C 4 「うん、やっとコッコさんを捕まえられるぞと思った。」</p> <p>C (大勢が一斉に) 「木に隠れた。」</p> <p>C 「横にも後ろも木があるところの、一番大きな木に隠れたの」</p> <p>C (子どもたち一斉に出てきてじっとする。潜んでいる事が分かる)</p> <p>C 8 (急いでもっと小さくなり動かない。ここでようやく気持ちが入った。)</p> <p>C 8 (得意そうにもっと小さくなる。周囲の子どもも同じようにじっとする。)</p> <p>C 9 (コッコさんになって出てくる。きよろきよろあたりを見回している。そっと走ってはまた振り返る。急いで前に進む。)</p> <p>C 8 (木に隠れながらそっと覗いてコッコさんの様子を伺う。) (コッコさんの後をそっとつける。)</p>
--	---

<p>T「あー、捕まってしまった。残念。ネズミさんが待っているのに届けられないね。」</p>	<p>C 9 (時々後ろを振り返ったり周りをきょろきょろしてキツネがいないことを確かめながら足早に進む。) (二人のやり取りを見ていた周囲の子どもたちがふふっと笑う。) 周囲で見ている子どもたちに、二人のやり取りが理解されていることが分かる。二人だけの遊びでなく、クラス全員を巻き込んだ表現遊びになっている。</p>
<p>T「ネズミさんのお家までキツネに捕まらないように卵を届けられる人いる？」</p>	<p>C 8 (C 9が周囲に気を取られた隙にC 9を素早く捕まえる。) (周囲の子どもたちから悲鳴が上がる)</p>
<p>T「ではC10ちゃん、何か作戦あるの？」</p>	<p>(子どもたちから「はい、はい」と手が上がる) 状況がよく理解できているからやりたいとの思いが強くなる。</p>
	<p>C10 (黙って頷き、「しー」と周囲を鎮める。) キツネ役とコッコさん役がどんどん変わっていく毎にそれぞれ工夫が見られる。捕まらない、絶対につかまえる、双方の思いがぶつかり、見ごたえがある。クラスの子ども全員が身を乗り出して楽しんでいる。</p>

◎コメントしたこと

心のある表現と、ただ見栄えの良い表現。先生が判断を間違えれば保育は理解力のある子供中心に進んでしまい、全員が面白い！とクラス一体となつての活動には至らないで終わってしまう。見えない心を見ていくということは熟練した眼と子どもへの信頼感がなにより必要となってくる。

まとめとして

表現の保育で何より大切になってくるのは

- ◎今、自分はどこにいて何になっているのかということが、表現している子どもにはもちろん、周りで見ている子どもに理解できているということ。

◎子どもに分かる情景を伝えていく。子ども

が、経験している事ではなくは理解できない。例えば一般的な花壇ではなく、春の保育で子どもの心に留まるよう取り上げた幼稚園の花壇であったり、ドングリそのものではなく、一つずつ大切に拾った自分のドングリ等、経験して知っていることを情景として伝えると理解できる。

またそれは必ず物語の情景でなくてはならない。一般的な春の情景ではなく、みにくい子の物語の世界の春、である。また一般的な情景ではなくコッコさんや動物たちが住む森の情景でなくてはならない。知っている情景を基にして物語の情景を想像するという作業をさ



「森のコッコさん」
そっと森を歩くコッコさん



「森のコッコさん」
みんなでコッコさんを守るよ



「みにくいあひるの子」
空高く跳ぶハクチョウ

せていく。毎日その世界で遊ぶことで物語の情景がより鮮明になってくるはずである。

- ◎子どもの分かりに付き合うこと、それを重ねていくことで、大げさではなく、実際に壮大な世界が見えてくる。
- ◎保育は積み重ね。
毎日、少しずつ積んでいく。僅かなことが重なって子どもが分かったと思える世界が描ける。
- ◎上手なそれらしく見える形を評価しない、子どもの心の表出であることを心に留めてその子なりの表現を認め、支えていくことでクラスに広がっていく。拙い表現にこそ思いがあることが多い。

(2) お話遊び（劇遊びを含む）の成果と課題

お話の世界を理解するには、物語の場面・場面で遊ぶことは大変有効である。しかしそれには、担任がお話を正しく受け止め、十分理解しておくことが大切となる。また、このお話で子どもの心が動く部分、理解できる箇所、または遊びになるところはどこか担任は正確に理解しておかねばならない。

そして、保育の中で、今はどのような場面であるのか、そこにいるのは誰なのかということがクラスの全員に理解できていることが必須である。その場面は担任が先導して示していくものである

が、お話そのものが見える情景でなければならない。例えば、お花畑一つを例に取っても「こびとといもむし」のお花畑は、冬から春に変わる様が見える—これまでの世界が一変することが目に見えるお花畑である—また、「美しい国」のお花畑は女王様が好んで作らせたひととき美しい花畑である、というように物語によって同じ花畑でもイメージする内容は全く異なる。

以上のように情景がクラスの子どもに見え、共に理解できた時、その物語の世界で登場人物になって遊ぶことで、子どもたちはそのお話を心から楽しみ、初めてお話を理解した喜びを味わうことができるのである。

6. 身振り表現の題材…なぜ身近な自然なのか？

身振り表現の題材は、多くの場合身近な自然もしくはそれに関連するお話を取り上げている。今項では題材の一部を紹介し、なぜ自然を取り上げるのかを述べたい。

題材として自然物が多いのは以下の理由によるものである。

(1) 身近に存在する自然を教育に取り入れる。

表4) にあげた題材は、B幼稚園内にある生き物、植物である。子どもは日々生き物や植物に触れて生活をしている。そうした環境作りを行っているのは、教育的見地からではあるが、もともと

表4) 年間を通しての主な題材一覧（B幼稚園）

春	夏	秋	冬
・チューリップ・さくら・すみれ・ヨモギ・蝶々・テントウムシ・メダカ・コイ・金魚・オタマジャクシ・ダンゴ虫・ザリガニ・オタマジャクシ・カエル・ツバメ	・バッタ・トンボ・カマキリ・雨・入道雲・雷・星・水・砂・土・色水・夏野菜（ナス・キュウリ・ピーマン・トマト	・コオロギ・鈴虫 木の実（クヌギ・シイ・カシ等々） 木の葉（サクラ・イチヨウ・ナンキンハゼ・モミジ・アオギリ等々）	・冬籠りをする生き物（ダンゴ虫・リス・クマ） ・氷・雪 ・花の新芽 ・葉っぱの新芽
（絵本・お話）は四季折々の作品を読む。以下の作品はほんの一部			
・カエルのびんちゃん ・ツバメの親子 ・雨降りツバメ ・テントウムシさん氣を付けて ・ピチとピチ	・夏の空の話 ・七夕様 ・なつのあばれんぼうたち ・おやまのブン	・やっとなだあおぎり ・まるむしのマー坊 ・赤い金のおふとん ・ぎんやんまのギン	（劇遊びの題材） ・リスのパナシ ・野うさぎのフルー ・パンビ物語 ・みにくいあひるのこ ・もりのこっこさん

存在するこれらの自然を最大限教育に取り入れることによって、子どもたちの豊かな感性につながるとした保育実践は、非常に意義深いことである。単に見る・触れる・聞くだけではなく、見たり・触れたり・聞いたりして何を感じたか何を思ったかを身体をつかって表現するのである。そこが身振り表現の楽しさであり、保育者にとっては子どもたちの思いを引き出すために苦勞するところである。B幼稚園に限らず、少しの隙間に咲く草花があれば、そこに小虫が集まるもので、こうした身近な自然を教育・保育に取り入れることが子どもにふさわしい環境づくりになると考える。

(2) 命に対する感性を磨く

生き物に触れることは、好むと好まざるとにかかわらず、多くの場合死に直面する。その経験は、子どもたちに疑問を呈し、不思議さを与え、時には悲しい思いをもたらす。そんな中で子どもたちは、誰に教わるわけでもなく、小虫や植物の世話の仕方を知り、生き物にも生活があることに気づく。時に愛着をもち大事に世話をし、付き合い方を知っていく。中でも世話をしている生き物が死んだときは、なぜ死んだのかということ幼児ながらに懸命に考える。「ご飯をやるのを忘れたから?」「病気だったのか?」と自分を顧みる経験をする。決して子どものせいではないが、一度は立ち止まって皆で考え合い次に生かそうとする。そんな気持ちを抱くことが命に対する感性を磨くことにつながると実感する。

(3) 季節を知り、豊かに生きる知恵がつく

日本のように四季がはっきりしていると、それぞれの季節の味わいを感じることができる。また、そこから考え出される知恵も湧いてくる。花見や紅葉狩りから発し、衣替えや日々の快適な暮らし方等を工夫する。この時期になると○○の花が最も美しいということや、あの虫を見ると○○の季節を感じるという具合に。子どもたちも四季折々の草花や小虫、小動物と遊ぶことによって、季節を感じ、その時々々の生活の仕方を知っていくものとして間違いなく知恵をつけていく。

(4) 子どもにとっては、見たて遊びがやりよい。

子どもは、小さな生き物にも自分と同じような生活があると思いつむようである。ダンゴ虫のお父さんお母さん兄弟など見立てられるのがそれである。大人が見るとどれも同じダンゴ虫にしか見えなくても子どもには日々暮らしている自分の家族のように思えるのが微笑ましい。それだけではなく、そこに自分たちと同じような生活があると信じ、あれこれとイメージする力を養っているのである。ツバメなどの遊びになると、それぞれの子どもの家庭のありようが窺えるほど世話やきの親ツバメになったり、泣き虫の子ツバメになったりして楽しむ。子どもたちの率直な感じ方や思い方を保育者も含め、皆で共有することで子どもの情緒が安定し、心の豊かさが増すのだと感じる。

7. 身振り表現の教育的意義

身振り表現の教育的意義についてまとめると以下ようになる。

(1) 生きる力の基礎を培う

岩崎洋子は「生きる力」について「子どもが主体的にかかわる遊びによって子ども自身の欲求を身体を通して充足し、遊びや生活を豊かにしていくことが子どもの心身の健康や体力向上につながり、生きる力をはぐくむことに繋がっていくと考える」¹⁰⁾と述べている。このことは全く同感であり中央審議会が示す「いかに社会が変化しようとして、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動しよりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など」¹⁰⁾とあるように『身振り表現』を通して、自ら考え行動する力、喜びや楽しさを感じる力、表現する力をつけ、よりよく生きられるための力がついてきていることを実践例等から感じとることができる。

(2) 「保育内容」全体に関わる総合的な遊び

身振り表現の分野だけで保育内容を見つめるの

は視野が狭いと指摘を受けることがある。しかし、子どもの実態は身振り表現で培った力は、文字通り体を用いての表現であるので「健康」領域と関わり、写真1)・写真2)で見られるように「人間関係」の領域と関わりそして自然やものとの触れ合いでは「環境」領域とかかわり、表1)～3)が示すように「言葉」の領域とも関わる。また、表現領域との関連では写真3)・写真4)のように「造形」と関わり、関連の歌を歌って「音楽」と関わっており、五領域全体に波及していることが分かる。そういう意味では身振り表現は保育内容全体にわたる総合的遊びになることも鮮明になってきている。

(3) 諸感覚を通しての表現

子ども達は、経験したことを基に、自分のイメージを具現化させる力を持っている。自分の思ったことを誰かに伝えたいという思いもある。見たこと、触れたこと、匂いを嗅いだこと等々すべてが入り混じった状態で伝えようとする。砂上史子は「人は五感を通して、自分の置かれた環境から多くのことを認知し、脳にインプットしていきます。脳は4、5歳までに大人の9割くらいまで成長しますが、その過程で五感を通しての刺激がないと、健全に発達しないことが分かっています」¹²⁾と記している。身振り表現では五感を通して知りえたこと、感じとったことを表現し、心も体も丸ごと成長していくものである。

8. おわりに

身振り表現の保育は難しいとよく言われる。見えない心を見ていくのであるから、わかりにくいし、それを伝えるのがなお難しいと。これを書きながら筆者も心を伝えるという作業の難しい壁を中々超えることが出来なかった。ただ、一見すれば、よい保育とそうでない保育の差は歴然とわかる。見えない心ではあるが、身体を通して表現すると、子どもの心ははっきりと見えるから不思議である。この場面を分かり、自分は何者であるかを理解して表現しているかどうか、友だちの表現が分かって、その世界を共有して楽しんでいるか

どうか。保育の中で、子どもの心は嘘も隠しもできず、あるがまま、理解の程度、楽しみの程度を正直に見せてくれるのが現場である。だからこそ私たちは子どもの弾む顔が見たくて、日々悩みそれでも前に進んでいけるのかもしれないと思う。

最近、幼稚園や保育所での教育の意味合いが変化してきたように感じる。保育内容の領域を学校の教科のように捉え、体育・音楽・国語・英語・絵画制作等々として教え、鍛錬しているように見えてしまうことがある。その中では、当然のように短時間で正解を出せるように訓練されたり、友達と競い合っただけで効果を上げるような仕組みになっていたりする。果してこうした保育内容でよいのか疑問を抱く。ノーベル医学生理学賞受賞の大隅良典東京工業大学名誉教授が記念講演で「私は競争を好む人間ではなかったが、顕微鏡をのぞいて観察する時間だけは誰よりも長かった」と語ったのを受けて科学への興味や関心、意欲は、自然事象の実験、観察抜きにしては高まらないのだと山城芳郎は平成28年12月18日(日)神戸新聞朝刊「教育歳時記欄」¹³⁾に記している。幼稚園や保育所の遊びは、前述のように、興味や関心を持ったことに触れて試して色々に自分流に納得することが重要であると常々考えている筆者にとっては、山城の記述は肝に感じ入る。子どもが『身振り表現』をしたくなるような自然環境を整備し、あれこれと試す時間を十分保障することが保育者の役割である。

今回提示した実践例は、ほんの一部に過ぎず身振り表現について全体を提示するのは甚だ困難であると認識している。それでも身振り表現は、子どもたちの興味や関心の在処を保育者が見極める作業や、子ども発の思いやイメージを的確に受け止めること等、子どもと保育者の協働で成り立っていることは確かである。教える・伝えることは保育者発の一方的な供与ではなく、子どもと保育者が真剣に向き合っただけで成す行為であると考えている。保育・教育は、子どもだけが主体でもなく、保育者が主体でもないところに、この保育の大きな意義があると考えている。身振り表現を中心に保育を行っている幼稚園や保育所は、少数であるが、兵

庫県下・大阪府下・奈良県下等々の幼稚園・保育園で、身振り表現を中心に据えて保育をしている園があり、公開保育をしながら共に研究し、情報交換をしている。

今後も、一層連携し、研究を深めたい。

〈引用文献〉

- 1) 「幼児の内面を育てる」広岡キミエ ひとなる書房 P77
- 2) 「幼児の内面を育てる」広岡キミエ ひとなる書房 P78
- 3) 「子どもの身体活動と心の育ち」岩崎洋子 建帛社 P15
- 4) 「うきうきわくわく身体表現遊び」高野牧子 同文書院 Piii
- 5) 「子どもの社会性を育てる」DVD
- 6) 「最新保育資料集2012」森上史郎 ミネルヴァ書房 P501
- 7) 「幼児の内面を育てる」広岡キミエ ひとなる書房 P78
- 8) 「幼児の内面を育てる」広岡キミエ ひとなる書房 P149
- 9) 「幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要」文部科学省
- 10) 「子どもの身体活動と心の育ち」岩崎洋子 建帛社 P10
- 11) 資料11「生きる力」と資質・能力について 文部科学省 中央教育審議会答申抜粋
- 12) 「保育内容 表現」砂上史子 ミネルヴァ書房 P24
- 13) 「教育歳時記」山城芳郎 神戸新聞朝刊 平成28年12月18日(日)